

No. 32

平成23年10月発行

静岡県老人福祉施設協議会
〒420-0856静岡市葵区駿府町1-70
静岡県総合社会福祉会館内
TEL 054-653-2311 FAX 054-653-2312
E-mail : sizurosi@vesta.ocn.ne.jp
http://www.shizu-roshikyo.jp/

しず老施協

巻頭言

「人の命を守るために」

静岡県老人福祉施設協議会
副会長 **海野 保**



このたび前支部長の御退任に伴い、残任期間を中部支部長として務めさせて頂くことになりました。微力ではありますが、ご協力をお願い申し上げます。

さて、三月十一日に発生した東日本大震災は、日本国への試練と称するには余りある大被害をもたらしました。被災者の方々に心からお見舞い申し上げます。県老施協としても最大限の支援をしていきたいと考えております。

地震発生から半年を経た今でも、

復興への道筋は十分に示されておらず、将来への展望も描けないでいる現地の報道を通じて、見えてくるのは被災者個人や小組織が気力を振り絞って自らの生活を立て直そうとしている必死な姿ばかりです。

そればかりか原発事故の影響も深刻であり、全国的に拡大してしまつた農畜産業への被害、今後のエネルギー施策のあり方や風評被害など解決すべき課題は瓦礫のごとく山積みそのままとなっているのが現状です。

このように、政府や電力会社に対する不満や、将来の東海地震への不安を挙げれば切りがありませんが、謙虚にかえりみれば、私たち自身にも今すぐ取り組むべき課題はまだたくさんあるように思えます。

今回の大震災では東北地方の多くの施設が被害に見舞われましたが、その中でも宮城県岩沼市の特別養護老人ホーム「赤井江マリンホーム」の対応は、私たちに多くの示唆を与えてくれます。

海岸に近い同ホームは、ラジオで津波発生の危険を知るや、直ちに約1キロ先の仙台空港のターミナルビルに避難することを決断し、利用者九十六名全員を九台の自動車でピストン輸送して、津波襲来の直前に全員無事に難を脱したとのことでした。もしも同じ状況に置かれていたら、私たちにも同様の対応が可能だったでしょうか。日頃から漫然と避難訓練

練をしているだけでは、このような対応はできないでしょう。

あらゆる可能性を考え、いざというときには職員一丸となって臨機応変に対応できる体制づくりが必要だと、改めて考えさせられました。

八月には駿河湾沖地震や集中豪雨がありました。想定を超えてやってくるのが本場の災害です。災害発生後になって「想定を超えていました」と言われても誰も救われません。

我々老施協としても、被害想定を幅を広げ、地域や立地、環境などの現実に即した避難方法、設備や資材の相互活用など自主防衛と共に、被害が広範囲にわたる場合には会員施設からの物的、人的支援など支部単位での広域的な協力が必要になってきます。

それには、会員相互の連絡網の整備と日頃からの施設間交流や連携がなければ、いざというときには十分に機能しないでしょう。

このように、今回の震災を単なる教訓に留めず、私たちが足元から自らを見直し、安心と安全の幅を広げられるよう活動していきたいと考えています。

今後とも、ご協力、ご指導のほど宜しくお願いいたします。

（特別養護老人ホーム

「カリタス21」施設長）

特集 「第三回高齢者福祉研究大会を終えて」

七月二十五日、静岡市内グランシップにおいて、第三回高齢者福祉研究大会が開催されました。研究発表者百六十二名（発表七十二題・ポスター掲示十三題）、参加者は福祉関係学生を併せて六百九十二名、総勢九百名を超え、盛大な大会となりました。

実行委員長

種岡養一（西島寮）



午前の講演会に先立ち、石川会長の開会のご挨拶で幕を開け、会長からは本大会の開催意図が示され、参加者の皆様へ謝意が表されました。

講演会は、長野県よりアザレアさんなど総合施設長の宮島渡氏をお迎えし、「変わる変えよう私のケア」と題して、介護に携わる人たちに新たな気づきや事柄の捉え方、考え方を再考させられる良い機会を頂戴しました。

講演会終了後、六ブロックに分かれて研究発表が始まりました。今回の研究発表題目の募集にあたり、募集締め切りを待たずに設定題数を大幅に超えてしまう事態に、前回を上回る参加者皆さんの気概を感じ、本

会の定着度に繋がるものと大変嬉しく思いました。

ただ、題数調整でご迷惑をおかけした施設には大変申し訳なく思っています。各ブロック会場においては、熱のこもった発表が続き、他施設の仲間から刺激を受けた方も多かったようです。

なお、今回の発表の中から、各会場ごとに優秀事例を選定し、会員の皆様に改めて紹介するとともに、選定されました下記の優秀賞六題につきましては、十一月二十二日（火）に開催予定の「介護力向上研修」研究発表 Ag a i n k（研修委員会主催）において表彰及び発表を計画しております。

結びに、大会当日の運営には、ぶっつけ本番に近い状況ながら大会実行委員会の皆様、企画経営委員会の皆様、研修委員会の皆様、21世紀委員会の皆様、事務局の一丸となつたご協力に深く感謝しております。ありがとうございました。是非とも次回もよろしくお願いいたします。

第3回高齢者福祉研究大会 優秀賞

ブロック	施設名	演題
A	みはるの丘浮島	これ、おいしいよ。
B	梅香の里	梅香の里 看取りケア 4年間の検証と考察
C	おおすか苑	尊厳ある看取りケアを目指して
D	ぬくもりの里デイ	自宅での快適な生活を目指してII
E	みなとの園	下剤ゼロを目指して!!
F	燦光	繰り返しの事故低減に向けての 取り組み



優秀発表事例の紹介

「これ、おいしいよ。」

特別養護老人ホーム みはるの丘浮島 給食委員会

みはるの丘浮島は開設八年目を迎えました。若いスタッフが多く、日々の業務に追われる毎日でした。

これまでも介護食に関する研究は取り組んできましたが、給食委員会を中心とした多職種協働の研究が行えるようになったのは、職員の成長の証のように感じます。

「誤嚥性肺炎を無くそう」どの施設でも掲げられる目標の一つではないでしょうか。口腔ケア、食前マツサージ、シーティングの見直し等どれも介護現場で取り組んできました。給食部でも介護食について学んできましたが、日常業務に組み込めずに立ち止まっていました。しかし、平成二十一年度の給食委員会で年間目標を「ソフト食を導入する」としたことで、委員会が本格的に始動できようになりました。

水分補給用ゼリー類の濃度調整、なめらか食の試食、とろみ剤の選定など、職員自らが体験することで、利用者様により安全な食事を提供できるようになりました。また、それら特殊食品の単価についても学んでもらい、安易に破棄しないよう指導してきました。

今回の取り組みの特徴は、既存の食形態に利用者様レベルをアップさせるのではなく、利用者様のレベルにあった食形態を提供することにあります。

それは決して利用者様の保有能力を軽視している訳ではなく、あらゆる手を尽くしてきた結果でもあります。

まずは栄養を摂って体力を回復して頂き、その上でレベルアップできるようにケアを継続していく方向に発想を変えていったのです。

介護部では、なぜキザミ食は危険なのかをもう一度考え、食事介助の基本から学び直し、看護部では血液データの追跡、機能訓練指導員は、食前マッサージの手法を介護士に指導、給食部では、ソフト食（施設内呼称）作成の均一化を図るよう、細部にわたるレシピ調整を行ってきました結果、介護食を喫食している方々の栄養改善を図ることができました。

今回の研究を通し、様々な視点から食事について考えることができ、食べることは生きることの楽しみであることと再認識できました。

多職種との連携を図る中で、お互いの役割を知り、その知識を発揮しあうことが、利用者様



へより良いサービスを提供できるようになるのだと思います。

「これ、おいしいよ！」利用者様の笑顔と共に届けられる言葉が私達の励みになります。これからも、この笑顔があふれる施設であるよう努力を続けていきたいです。

『自宅での快適な生活を目指して』

ぬくもりの里デイサービスセンター

介護士 折笠弥生
介護士 高橋知久

ぬくもりの里デイサービスでは、昨年よりデイサービスを利用される方々に対して、自宅でも転倒せず快適に過ごせるように、転倒防止プログラムを作成してきました。

利用者アンケートを実施したところ、原因はバランスを崩す事で転倒する確率が高いことが分かりました。今年、機能訓練指導員の下「バランス力の強化」を主にしたプログラムを取り入れてみました。経過を追いながら入浴時や訓練時に観察していったところ、足の「冷え」や「浮腫」が目立つことに気が付きました。そこで、「冷え」や「むくみ」の解消となる足裏を刺激するトレニングを追加し、楽しみながら出来るものを考えてみました。

①全員で掛け声をかけながらの「四股ふみ火花」

②靴を脱いで足の指をグーパーと

動かす「リラククスストレッチ」

③利用者が作ったアスレチック風の「手作りつば押しコース歩行」

これらのトレニングを通じて、日頃のストレス解消、下肢筋力の維持と向上、バランス能力のアップや関節可動域の改善等が見られ、明らかに血行が良くなってきたと思われました。

トレニングを行った二十二名の利用者中、半数の十一名に成果ができたのは成功だったのではないでしょう。

楽しみながらできるトレニングの取り組みとして、今回平行棒を中心に、アスレチック風のコースを利用者の手作りで作ったものを訓練に取り入れられました。

ペットボトルの蓋を利用した踏み板は、お手製で親しみがあがり、トレニングでの笑顔はとても印象的でした。

冬の時期には、片麻痺の利用者が手作り編み物機でレッグウォーマーを編んだり、編み物の得意な利用者が冷え性の人に靴下やレッグウォーマーの編み方を教えたりするなど、利用者同士の温かな交流も生まれました。

研究テーマ「自宅での快適な生活」はこのような広がりを見ることが出来ました。今後の課題として、今回改善が見られなかった利用者へのアプローチを考えていきたいと思えます。



『梅香の里 看取りケア 4年間の検証と考察』

特別養護老人ホーム 梅香の里

看取り師 松村宏美
相談員 水野 真

看取り介護加算創設により、看取りケアが制度上に位置づけられ既に四年が経過しました。看取りケアが推進されている中、当施設も取組みを積極的に進めてきました。しかし、それが適切であったのか検証したことはなく、「家族からの感謝の言葉は本意であったのか?」、「携わる職員への負担は?」等、多くの疑問点や不安が浮かび上がります。そこで、当施設における看取りケアに関する適切性を検証する必要性を強く感じ

アンケート調査を実施するに至りました。看取りケアに対する家族とスタッフの意識の実態や課題等について明らかにするとともに、今後の看取りケア進展の方向性を探ることも目的としました。

調査結果からは多くの示唆が得られました。まず、家族の回答率が七割を超えた点と、「親族からも喜んでもらえた」「職員と一緒に看取れた」等、ケアに対して好意的回答が約九割にも達したことは予想外でした。食事摂取をはじめ、各職種が専門性をもって取り組み、ケアの見直しや環境への配慮等の細かな心配りが奏功したのでしょうか。しかし、一方では「何もしてあげられなかった」「衰弱して行く姿がつかかった」等、半数の家族が辛さを感じていた結果も判明、家族も一緒にケアに参加す



る工夫や心のケアも重要です。また、職員の九割が看取りケアに臨み不安を抱いていた事実も課題です。先輩職員の助言や緊急時対応のイメージ、そして「その利用者の生活歴や性格を含めた『根拠』を持つケア」の実践が肝要でしょう。

他にも多くの項目を考察しましたが、看取りケアの持つ重要性は一貫して窺い知ることができました。適切な看取りケアの持つ意義は、利用者の利益向上はもちろん、介護施設の社会的評価やスタッフの資質向上等非常に幅広いと感じます。今後益々高齢化が進む日本において憂慮すべき問題は財政面や人材面等多岐に亘ります。介護施設での適切な看取りケアの拡がり、現在生じている諸問題を解決していく大切な一歩であることは間違いないと思えました。

東日本大震災災害ボランティア活動報告

〜きつとこの先へ〜

社会福祉法人 春風会 あしたかホーム
(原高齢者福祉センター 所長)

深沢康久

活動期間…平成二十三年六月二日

六月六日 (実質活動三日間)

活動地域…岩手県大槌町

(拠点…遠野市まごころ寮)

活動三日目、爆弾でも落とされたかのような中学校、そのグラウンドで

復興のイベントが開催された。参加者の歌声を聞きながら被災した中学校の校舎を一人で見てまわった。

ここに来て初めて涙があふれた。悲しいからではなく、こんな目に遭っても元気な子供達の姿やその様子を眩しそうにみる大人、祭りを支える高校生ボランティア、ふるさとを歌う皆の力強い歌声等…人の強さに感動していた。

私たち「ゆうゆうの里第十次隊」が行った活動は、支援を必要とする九名の高齢者の入浴介助と避難所・自宅と特養施設までの送迎、必要物資の調達や新たなニーズ確認だった。対象となる方は自宅が被災に遭い自衛隊等の設営する入浴施設では手すり等がなく入浴できず、他の介護サービスが受けられていない方々で、地元の地域包括支援センターから依



頼を受けていた。そこで出会うお年寄り、避難所生活の長期化による体調不良などが心配され、感染症の蔓延、ストレスや運動不足による機能低下など多くの問題を抱えていたが、皆さん体調の変化はあるものの日常生活をまわりの方々に支えられ何とか暮らしていた。

災害時においても、私たち介護の専門職はその人らしい暮らしの継続を目指して支援していきたい。「以前の暮らしを取り戻す」きつとこの先に、目指す岩手や東日本の復興があることを願う。時間が経つにつれてこの震災の被災された方への意識が薄れ、復興支援の手が不足することが心配される。全国からもっと多くの末永い支援が必要とされている。また機会をつくり皆さんの故郷へ行きたいと思う。お元気でいてほしい。

普通の生活 — 自立支援介護 —

特別養護老人ホーム 灯光園

施設長 澤島久美子

御前崎市にある灯光園は、平成十九年二月にユニット型の施設を建設し、引越しをしました。設立からは三十五年を迎えます。平成十九年から全国老協主催の介護力向上講習会に参加し、おむつゼロを目指しました。

研修に参加した初めての会で、パワーリハビリのマシンのビデオを見せてもらいました。介護度5でもマシンの訓練で歩くことができるようになったお年寄りを目のあたりにして、自分の施設にいる車椅子に座ったままの利用者の姿が浮かびました。あの人たちが歩けるようになったら、喜ぶだろうな...と思いつつ園に戻り、早速、理事会でお願いをしました。

利用者がパワーリハビリをやるための担当職員をつくるため、パート職員の数を増やし、リハビリ担当として任命しました。リハビリに行くことで、利用者の生活にメリハリが出ました。職員も利用者も元気がいっぱいである掛け声が聞こえます。

おむつゼロの取り組みには、「水・メシ・くそ・運動」の合言葉があります。水を一五〇〇cc、栄養を一五〇〇キロカロリー、下剤を使わないトイレでの自然排便、マシンと歩行訓練の取り組みを根気よく続けます。水を増やすためには、生理学を学びます。水の摂取が増えてくると、利用者のほんやりがなくなり、会話が増えてきます。心不全などの医学の知識が必要な方には、看護師が介護士の先生となって協力をします。

トイレでの排便は利用者を受け身ではない普通の人に戻すと感じます。二人介助だった人が、何とか立てるようになり、一人介助になった時の利用者は、嬉しそうでもあり、誇らしげに見えます。その排泄のために、職員は排泄のメカニズムを勉強し、トイレ介助を繰り返します。結果、利用者の生活には変化が見えました。皆さんよく食べ、良く飲み、よくしゃべり、元気で、歩行訓練や散歩、買い物に行くなど、どんどん外に出てきます。そして夜はよく眠ってく

れます。認知症の周辺症状が消えていきます。

最初の取り組みでは、とりあえず紙おむつをやめればいいのかと考えていたのですが、おむつをゼロにした後も取り組みは続きます。現在は「全員常食」が目標です。利用者には普通の生活をしてほしいと願っています。



施設名称の由来と想い

「炉暖の郷」命名の由来と想い

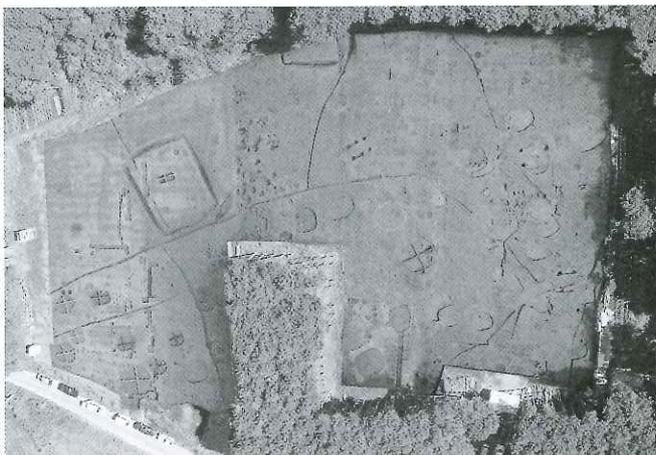
理事長 後藤政美

設立当初、施設の敷地の文化財調査により、縄文・弥生時代の竪穴式住居が多数（六十八戸）発掘されました。この地に集落があり、人々の暮らしがあったことが分かりました。

子を産み、育て、慈しみ、老いて、終焉を迎えていく郷であったと思いを馳せます。はるか悠久の時を超え、この地に社会福祉施設が生まれ、再び人々の暮らしが戻りました。

いにしえより人々の暮らしは、灯火に明るさを求め、炉で暖を求めた暮らしを育んできたと思われまふ。この居心地のよい暖かさをもった福祉の提供を、この地に再び灯し続けていきたいと願い「炉暖の郷」と命名しました。

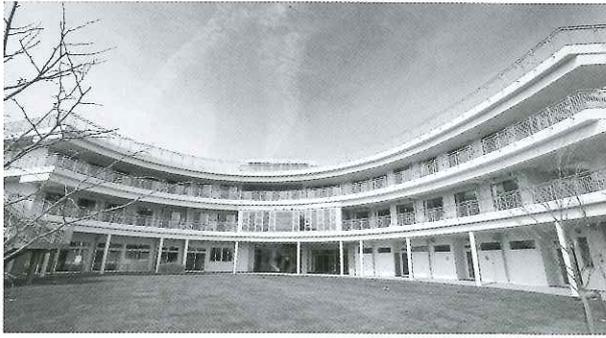
早、開設から八年目を迎えるに至りました。これからも、この想いを託した施設づくりをご利用者様と職員、共に目指してまいります。



八兵衛洞遺跡（航空写真）

新加入施設紹介

平成23年10月現在



特別養護老人ホーム

きじの里

法人名 社会福祉法人「峰栄会」
 開設日 平成23年4月1日開設
 (入会申込 平成23年4月1日)
 施設長 加藤 美恵子
 所在地 浜松市浜北区染地台5丁目4
 入所定員 80名
 短期入所 20名

デイサービスセンター (単独)

きさらぎデイサービスセンター

法人名 社会福祉法人「慶成会」
 開設日 平成20年3月1日開設
 (入会申込 平成23年4月1日)
 施設長 熊谷 博幸
 所在地 浜松市中区花川町818-8
 デイサービス 35名



短期入所生活介護

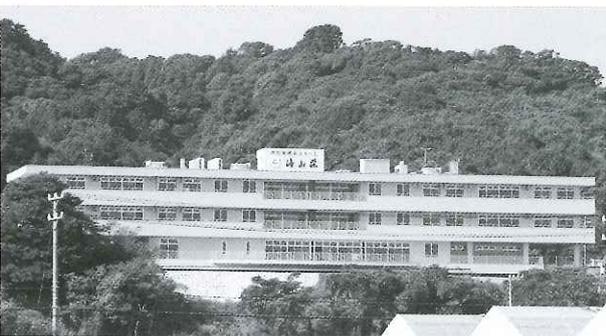
野の花

法人名 社会福祉法人「慶成会」
 開設日 平成19年11月15日開設
 (入会申込 平成23年4月1日)
 施設長 加藤 玲子
 所在地 浜松市西区大山町2847-1
 短期入所 29名

デイサービスセンター (単独)

しじみづが福祉の杜デイサービスセンター

法人名 社会福祉法人「慶成会」
 開設日 平成20年6月15日開設
 (入会申込 平成23年4月1日)
 施設長 山田 直
 所在地 浜松市中区蛸塚1丁目9-17
 デイサービス 60名



特別養護老人ホーム

海山荘

法人名 社会福祉法人「正廉会」
 開設日 平成17年12月1日開設
 (入会申込 平成23年4月1日)
 施設長 鍋岡 俊之
 所在地 牧之原市片浜1013-1
 入所定員 60名
 デイサービス 37名 短期入所 10名

新加入施設紹介

平成23年10月現在

デイサービスセンター（単独）

山崎デイサービスセンター

法人名 社会福祉法人「大須賀苑」

開設日 平成22年9月1日開設

（入会申込 平成23年4月20日）

施設長 大場 博行

所在地 掛川市山崎60-51

デイサービス 25名



特別養護老人ホーム

高砂

法人名 社会福祉法人「博友会」

開設日 平成23年5月1日開設

（入会申込 平成23年5月16日）

施設長 高橋 利典

所在地 沼津市高砂町1-5

入所定員 80名

デイサービス 15名

特別養護老人ホーム

松野の里

法人名 社会福祉法人「富士厚生会」

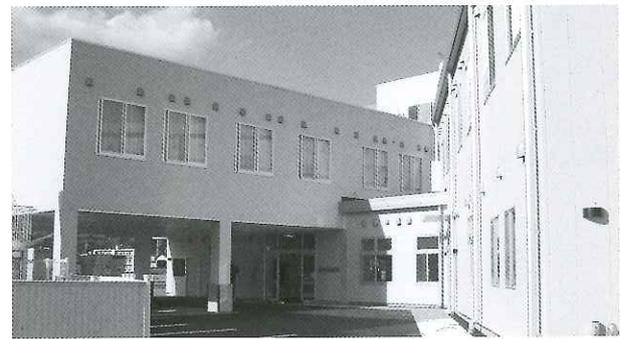
開設日 平成23年4月1日開設

（入会申込 平成23年5月18日）

施設長 宮崎 良廣

所在地 富士市南松野2604-1

入所定員 29名



特別養護老人ホーム

平成の杜

法人名 社会福祉法人「寿康会」

開設日 平成23年5月1日開設

（入会申込 平成23年5月1日）

施設長 若林 久美子

所在地 駿東郡小山町小山255-2

入所定員 29名

地域密着型特別養護老人ホーム

はまひろがお

法人名 社会福祉法人「浜岡厚生会」

開設日 平成23年6月1日開設

（入会申込 平成23年6月1日）

施設長 桑波田 知子

所在地 御前崎市池新田460-1

入所定員 29名



（お詫び）6月以降の新規加入施設、「ケアハウスはるかぜ」につきましては、紙面の都合上、次号以降に掲載させていただきます。

活動報告

【老施協】

★ 二十三年七月二十五日、第三回高齢者福祉研究大会をグランシップにおいて開催、参加者約九百二十名

★ 理事会 二十三年八月二日、会長表彰候補者の承認、高齢者福祉研究大会開催結果報告、特養におけるケア連携協働研修、東日本大震災による災害ボランティア派遣等について協議

【企画経営委員会】

★ 二十三年六月七日、県との懇談会、県への要望、調査研究テーマ、職場定着支援事業、しず老施協の編集・校正・企画について協議

★ 二十三年七月八日、高齢者福祉研究大会実行委員会等との合同会議、全体スケジュールと役割分担、班別業務について協議

★ 二十三年八月二十五日、高齢者福祉研究大会実行委員会等との合同会議、研究大会の開催結果について協議

★ 二十三年八月三十一日、県との懇談会、調査研究テーマ、職場定着支援事業等について協議

【研修委員会】

★ 二十三年六月十六日、個別ケア研修、介護力向上全体研修について協議

★ 二十三年七月八日、高齢者福祉研究大会実行委員会等との合同会議、全体スケジュールと役割分担、班別業務について、同日、個別ケア研修、介護力向上全体研修グループワーク研修等について協議

★ 二十三年八月二十五日、高齢者福祉研究大会実行委員会等との合同会議、研究大会の開催結果について協議

★ 二十三年八月三十日、個別ケア研修会を静岡音楽館にて開催、百三十名が受講

【21世紀委員会】

★ 二十三年六月十四日、接遇マナー研修会、異業種講師研修会について協議、県地震防災センターの視察

★ 二十三年七月八日、接遇マナー研修会の役割分担、施設間職員交流研修について協議、同日、高齢者福祉研究大会実行委員会等との合同会議、全体スケジュールと役割分担、班別業務について協議

★ 二十三年八月十日、接遇マナー研修会を静岡音楽館にて開催、百六十五名が受講、同日、施設間職員交流研修の組合せ、異業種講師研修会の役割分担、高齢者福祉研究大会の反省点について協議

★ 二十三年八月二十五日、高齢者福祉研究大会実行委員会等との合同会議、研究大会の開催結果について協議、同日、施設間職員交流研修、異業種講師研修会について協議

【高齢者福祉研究大会実行委員会】

★ 二十三年七月八日、企画経営委員会、研修委員会、21世紀委員会との合同会議、全体スケジュールと役割分担、班別業務について協議

★ 二十三年八月二十五日、企画経営委員会、研修委員会、21世紀委員会との合同会議、研究大会の開催結果について協議

【特養委員会】

★ 二十三年六月十六〜十七日、看護、介護職員によるケア連携協働研修会を総合社会福祉会館において開催、百二十三名が受講

【軽費委員会】

★ 二十三年六月二十四日、施設栄養士研修会を総合社会福祉会館において開催、二十七名が受講

★ 二十三年七月六日、相談員研修会を白寿園研修センターにおいて開催、三十四名が受講

【在宅委員会】

★ 二十三年五月二十日、活動計画、研修計画、調査研究テーマ等について協議

編集後記

● 高齢者福祉研究大会へのご協力ありがとうございました。発表者

は多くが若手の職員の方々であり、不慣れた発表の場で緊張している様がよく伝わってまいりました。各事業所それぞれが多様な取り組みをしており、優秀発表の結果に関わらず、発表施設は自信を持って今後の実践に生かしていただけたらと思います。

(宮澤)

● 私自身、いまの仕事を始めから三年が経ちました。施設の中でいろんな境遇の利用者の方々とお話をさせていただいているうちに、この人たちにとつて私たちの施設で暮らしていくことが本当に幸福なことだろうかと自問自答することが多くなりました。なかなか答えない悩ましい問題ですが、そこにまた云うにいえないうりがいを感じている今日この頃です。

(伏見)

● 東日本大震災を受けて日本が大きく変わっていくような気がします。電力発電を何に頼るのか。今年は今全国中がエコ、節電対策に取り組んだ夏となりました。苗が売り切れてしまうほどにいたるところで緑のカーテン。「うちわ・扇子」が大活躍で、よき日本の時代を感じていました。

七月二十五日研究大会が成功でき、発表者の熱弁に刺激とパワーをもらいました。「踏み出そう！ 一歩上の介護力」サービスの質を高め合っていくきっかけになれたと感じています。

(花木)